

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370104855		
法人名	社会福祉法人 リデルライトホーム		
事業所名	グループホーム カムさあ		
所在地	熊本県熊本市北区龍田陳内3丁目37-7		
自己評価作成日	令和3年12月3日	評価結果市町村受理日	令和4年2月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和3年12月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は社会福祉法人リデルライトホームが運営している。カムさあの基本運営理念として「その人らしく」「自己決定」「自己実現」「だれからも拘束されない」などを掲げ、その方らしく生きることのできる施設運営に取り組んでいる。我が家のようにくつろげ、最後までその人らしく生きること支援しながらも、ご家族との絆を大切にすることをケア理念としています。また、ご本人のペースで自分らしく暮らしていただけるよう、主治医と連携を図りながら取り組んでいます。併設施設に児童の放課後等デイサービスがあり、昼食は知的しょうがい者の施設に委託しており、地域共生社会の実現を目指しています。入居者も支援される側ではなく、児童を見守り支援する側の役割を持ってもらうことで世代間での交流・支え合いが可能となりました。どのような障がいがあっても住み慣れた地域で最後まで尊厳のある暮らしができるよう支援して参ります。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

総合支援センターとして児童と高齢者の世代間交流ができる事や感染対策を施しながら地域との関わりを継続し、近隣からの入居者等地域共生社会を確立したホームである。昨年度よりIT委員会と連動させたオンライン面会やウェブ・スカイプ・ズーム等により会議や研修、多様な委員会活動等によりコロナ感染症に対応し、全員でブラシアップを図っている。103歳を最高齢として平均介護度も高い中で、歩く事の支援に移動手段(職員手作り)を確保し、自分のペースで穏やかに過ごされる姿に職員のケア力が表われ、生きることの支援が最終章に繋がることとして入居者に寄り添い、思うがままに生きられる入居者の姿にこのホームの取り組みが如実に表われている。職員のスキルアップに新風を入れて事業を刷新し、老若男女、障害の如何に関わらずホームに集い、お互いが支え・支えられる関係が築かれている。コロナ禍により、特に「個」の注視していることで家族へ安心感を与えるとともに家族から絶大な信頼を得たホームであり、立地的な側面から災害時の避難場所としての地域への寄与に大いに期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、職員が目にしやすいよう玄関に掲示している。入居者の多様な暮らし方や自立支援を理解し、自己決定のできる支援を目指し実践している。事業所の特性の理解を深める為職員研修等オンライン研修、DVD研修等新しい形で法人全体で学びを深めている。	社会福祉法人リデルライトホームの事業所として、先駆者の崇高な愛と奉仕の精神を継承することを大前提に、最期までその人らしい生活の支援に真摯に取り組むホームが形成されている。例として最高齢の入居者の生活に表出している。また、総合生活援センターとして児童と高齢者が共に支えあう地域共生として集い、共に過すホームとして確立している。スケールメリットを生かしながらの運営、研修体制に変革を図り、職員のスキルアップに新風をいれて事業を刷新している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍のため、運営推進会議や行事など開催が難しい状況にあるが、可能な範囲で地域の方との交流を実践している。地域のお店など利用し、災害時は、地域を支援できるよう校区社協とも連携を図りながら安心して暮らせる支援をしている。	地域共生社会を目指しながらの運営体制の中で、地域世帯の減少化という環境の中、コロナ感染症という難局にあり、自治会長宅や民生委員への訪問及び民生委員の訪問はあるものの、例年通りの交流(地域のサロン等)に出かける機会)等の地域密着型事業所としての本来の良さは減少しつつある。今後、感染症対策を施しながらこれまでの地域との関わりを継続する意向である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍のため、直接地域に出向くなどの機会は難しいが、web等を活用し可能な範囲で実践している。今後も地域の中で自分らしく暮らし続ける支援を新しい形を模索しながら実践していく。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度はコロナ禍により運営推進会議の開催が困難であった。自治会長や民生委員さんへは今まで通りの報告が出来ず、報告書でやり取りする等検討、運営に反映させる新しいシステムを確立したい。	今年度はグループホーム・共用デイ・放課後等デイサービス等が合同での開催であるが、書面審議とし、現状報告の他、新型コロナ感染症対策としての課題や法人での対策等具体的な問題を提起している。これまでの地域の中での基盤作りに運営推進会議が一役を担っていたことは、防災訓練を組み入れ地域からのアドバイスを得たり、地域の安心や介護力のアップに職員の持つスキルが生かされた事に表出している。今年度は1年間をまとめあげ、委員には持参する意向である。	この会議を書面で終わらせず、一堂に会して開催することに意義があると捉え次年度は開催方法を検討する意向である。この会議を生かしながら、地域住民への認知症ケア推進や更なる交流促進に繋げて頂きたい。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センターと定期的に連携を図っている。運営に関しては、熊本市の担当者に確認するなど、常に連携を取っている。又、介護サービス支援員に相談等行い、サービス向上に努めている。	行政とメールを通じた情報交換や、運営について担当部署の確認や、介護認定更新の代行等必要最低限の関わりがある。例年であれば、運営推進会議に地域包括支援センターからの毎回の参加を得て降り、協力関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、研修等の実施により職員のスキルアップを行っている。研修方法もコロナ禍のためweb等を活用した研修を実施している。内部研修会や外部研修会に参加して、アンケートについてもwebで回答できるシステムを設け身体拘束をしないケアの実践を行っている。また、法人において委員会を設置し法人全体で情報共有をしている。	身体拘束について研修方法(ITの活用等)を駆使しながら開催している。委員会からの不適切ケアアンケート等を検証、分析し拘束や職員へのストレスチェックも行い、虐待や拘束のないケアを実践している。職員のゆとりあるケアと自由な環境の中で、入居者の思うがままに生きられる姿に、このホームでの取り組みが表われている。人感センサーも付けたままにせず、時間のかかるケア(夜間帯)のみ使用することとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待については、研修等の実施により職員の理解促進を行っている。研修方法もコロナ禍のためweb等を活用した研修を実施している。また、法人において委員会を設置し法人全体で情報共有し実践している。不適切ケアについて職員アンケートなど行い虐待防止の徹底に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居の段階で権利擁護について説明している。年に1回は学びの機会を設け、必要時は制度の活用ができるよう学びを深めている。フォーマルな社会資源として関係機関との連携にも努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居に関する契約時は、ご本人やご家族が安心して入居できるよう十分に時間をとり説明を行っている。制度変更により、契約内容や重要事項内容に変更があった場合は、必ず説明を行い契約書もしくは変更合意書を取り直している。また、日頃から不安や疑問点などお尋ね頂ける関係作りに取り組んでいる。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご本人さんの要望は日々暮らしの中で迅速に対応している。コロナ禍で面会制限がかかり、ご家族と直接話をする機会が大幅に減った。文書はメールでPDF添付にして、メール電話のやり取りが増えた。面会出来る期間に出来るだけご家族のご意見を聞くように心掛け職員間での共有を図りたい。	入居者には日々の関わりの中で聞き取りし、不平不満も生きる力であると捉え、本人の訴えには苦情処理委員会の中で検証する体制としている。家族によっては頻回に訪問されたり、予約制での面会とし訪問時に意見等を収集している。家族の意見によりIT委員会と連動させ、オンライン面会とするなど家族の意見を反映させている。また、文書やメールにて家族に情報を発信している他、コロナ禍に個人に焦点を当てた写真を家族へ配布することで安心へと繋げている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者と共に運営に関する会議を月に1回設けている。週1回は代表者と直接、入居者の体調やご家族の意見などを細かく話ができる時間があり、運営に反映するような仕組みが確立されている。現場の職員さんからも意見を言いやすい雰囲気作りを目指している。	月1回の運営委員会により法人18事業所の情報や意見等を集約し、理事長と相談する体制としている他、理事長も職員の意見等を直接把握されている。課長・係長の会や研修委員会から名称を変えた人材育成・業務委員会、感染委員会等充実した委員会活動によりブラシアップを図り、IT委員会も進行し、コロナ禍の中で生き生きとやりがいを持って働きやすい環境としている。管理者は、働きやすさや異動への希望、目標設定等個別に面談し、理事長もホームの状況等を把握に毎週訪問されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月に1～2回管理会議や月1回の安全衛生委員会(web会議)等で代表者を含め運営に関する事や労働環境・給与について話し合う機会を確立している。職員各人の勤務状況や就業環境等、管理者がこまめに把握し働きやすい職場環境作りをこれからも目指す。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実 際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機 会の確保や、働きながらトレーニングしていくこ とを進めている	施設内研修・事業所研修・施設外研修な ど、それぞれのキャリアのあった学びの機 会を確立し、キャリアアップを法人全体で支 援している。また、今年度よりzoom等ITを活 用した研修にも力を入れている。現場でも、 経験年数や習熟度に応じて丁寧な実践指 導を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する 機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互 訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上さ せていく取り組みをしている	地域密着型サービス連絡会や龍田校区介 護事業所連絡会等に所属し、職員が気軽に 研修会や同職種の交流に参加できるように 取組み、サービスの質の向上を目指してい る。今年度はコロナ禍のため、直接的な往 来は難しいが、メール、FAX、web等で上記 関連機関との連絡等行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っている こと、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本 人の安心を確保するための関係づくりに努めて いる	入居初期はできるだけ安心して過ごしてい ただけるよう話しやすい環境をつくり、でき るだけ傍で話が聞けるようにしている。ご本人 のご意見を尊重し、安住の場となるようこれ からも努力していく。入居初期に関わらず、 常に良好な関係を継続していける様、都度 お話を傾聴するなど努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困ってい ること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、 関係づくりに努めている	安心してご家族をご入居いただけるよう、不 安や要望等を気軽にご意見頂ける、より良 い関係の構築に努めている。また、ご家族 の話にも耳を傾け、その方らしい生き方がで きよう今後も努める。コロナ禍のため、出 来る限りの感染対策を講じ、ご家族の不安 軽減に努めていく。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が 「その時」まず必要としている支援を見極め、他 のサービス利用も含めた対応に努めている	その方らしく生活していただけるよう、必要と される支援や他サービス利用も含め、入念 なアセスメントや寄り添い傾聴するなど安心 感の提供と必要な支援や優先順位の見極 めに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	お一人お一人の個性や残存能力を活かして頂けるような自立支援を意識した取組みを行っている。生活の中心は入居者であること。共に過ごすことで信頼関係を構築し、それぞれが生活の中に役割を持ち楽しみを持って生活して頂ける様心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人とご家族は相互に大切な関係であることを職員は理解している。コロナ禍のため可能な範囲での面会等対応を行い、ゆっくり過ごしていただけるよう日頃よりご家族の絆を大切にできるよう心掛けている。こまめに近況報告やご要望を聞きながら共に支える関係に努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者がこれまでに築き上げた関係性が立ちきれないように支援をしている。今年度はコロナ禍のため、外出の機会は難しいが、電話や手紙などで継続した関係作りに努めている。 例)美容室・病院・外泊支援・外出支援など。	これまで通りの馴染の場所への外出は無理であるとともに家族の訪問に制約もあり、家族との関係が希薄にならないよう正月を前に年賀状作成を支援し、書かれている様子を郵送している。また、毎年の年賀式ではお屠蘇でお祝いをすることで1年をスタートさせている。かかりつけ医や晩酌の継続や、これまでの経験を生かした柿の皮むき等今できることを支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士楽しみや生活を共に過ごしていく良好な関係を構築出来るよう支援に努めている。日常生活場面(食事・お風呂・体操・くつろぎの場など)においても、入居者同士お互いに声掛け合うなど良い雰囲気作りに努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	出会えたご縁を大切にご本人やご家族の相談内容に耳を傾け、出来ることを職員で考える姿勢を継続している。サービスが終了しても、行事への案内や相談なども支援している。また関係機関とも必要に応じて、連携に努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の希望や意向を汲み取る姿勢で見逃さず、職員間でその思いを共有し、希望に沿った生活が送れるよう日々の支援に努めている。また、ご本人の意向の確認が困難な場合は、ご家族と相談しながら生活の在り方を協議し、ご本人の思いが反映された暮らしをこれからもサポートしていく。	入居者の言動や行動を把握し個々の思いを気づき、意思を尊重しながら本人本位の生活になるよう努めている。意思疎通の困難な方には、職員は入居者とよく会話を交わし、家族の情報や相談しながら本人の望む生活の支援に努めている。入居者の声「見たい」に応え、月を見に出る等本人を視点に支援している。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活習慣や馴染みの暮らしを可能な限り継続することで安心した生活を送って頂ける様、各職員が情報収集した内容を共有し活かせるよう支援に努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録を24時間表を活用することで、食事・睡眠・排泄・余暇の過ごし方・リハビリ等を時間軸にして記録するようにしている。また、日々の変化など特記の確認や職員間での情報共有を積極的に行い、現状の把握に努めチームケアを実践している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	生活の中心はご本人であること。ご本人の思いや意見を汲み取り、より良い生活を営んでいただくための支援に努めている。課題解決に向けたカンファレンスでは、ご家族の意向も踏まえ職員間による意見交換も行い介護計画の立案や変更を実践している。また主治医の意見を反映させるようにしている。	毎月モニタリングを行い、本人の言葉や様子から満足度を把握し、自力摂取困難にプランを見直す等細やかな見直しが行われている。超高齢化にあったも、楽しい生活をしたいとのニーズに、自分のペースで穏やかな生活を目指して具体的なサービスを立案させる等本人の思いに沿った個別的なプランである。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録用紙については24時間表を活用し、個々の生活状況や身体状況を記録している。気づきや変化を大切に積極的に職員間で情報共有し、日々のケアに反映できるよう努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族にとって必要なニーズについて、柔軟に対応できるよう職員全員が協力・連携し多方面から検討するようにしている。また、幅広い支援がご本人の生活をより豊かにすると考えている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者お一人お一人が地域住民の一人であるということを理解し、地域に開かれた施設運営に努めている。可能な限り地域の社会資源を活用し、豊かな生活となるよう支援に努めている。またこれからも地域の方々に信頼していただけるよう、より良い関係に努めていく。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医とはご本人の生活上での困りごとも含め相談し、ケアプランに反映させている。ご本人の性格を理解した上で緊急時や往診時の声掛けや対応をして下さるので適切な医療が受けられている。また、ご家族への説明も納得が得られるよう話して下さる。	本人・家族の希望するかかりつけ医を訪問診療や現在はホームでも受診に対応し家族へ報告している。口腔ケアについては必要な方のみ定期受診や歯科衛生士による点検が行われている。自歯の方は特に衛生士によるチェックが必要として、職員も直接指導やアドバイスを受ける事で口腔ケアの重要性を再認識している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護体制は専任の看護師を配置している。介護職員と同様に日々の関わりから常時、連携・相談が出来る体制を整えている。看護師及び介護職相互で入居者の変化や気づきに細やかに情報共有しケアに努めている。また、24時間体制で連携が図れるよう体制整備している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された際は、可能な限りお見舞いに行き、入院中の状態把握や担当看護師等との情報共有に努めている。また、ご家族や医療機関の担当医や連携室との情報共有や連携により、早期退院支援がスムーズにできるように努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期については、ご家族のご意向を十分に伺い、対応方法などご家族や主治医と連携を図れるよう体制を整備し、チームケアで支えることができるよう職員間においても情報共有し連携に努めている。その方らしい最期を送って頂けるよう、本人及びご家族に寄添う対応に努めていく。	重要事項説明書の中に、重度化した場合の対応、看取り介護に関する支援、看取り介護に関するイメージなどわかりやすく記載し、入居時に説明を行っている。生きることを支援するなかで、看取りがあるということを全職員が共有し、その方らしい最期を、本人・家族に寄り添いながら対応している。	看取りに関する指針の中に、できるだけ多くの職員でお見送りをすること、支援後の振り返りの機会を会議の中で持つ事が記されている。ホームにご縁のあった方への思いが伝わり、変わらぬ支援が期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応は研修会等での学びとマニュアル作成をしている。しかし、全職員が緊急時などの対応においては実践力に不安もある。今後も定期的な勉強会や学びの場を設け、不安解消を行いたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回に消防訓練を地域の自治会や地域消防団と連携しながら実施していましたが、コロナ禍で事業所職員と法人内の災害対策委員会・設備会社で実施している。防災意識を全職員で持ち、定期自己点検や屋外の環境整備に努め法人内でも災害対策委員会を開催し災害時への準備と意識の向上を図っている。また災害時に備え備蓄や物資の備えなども委員会と共有している。	コロナの影響から今年度は6月(昼想定)、11月(夜間想定)に、法人災害対策委員会、設備会社の協力により消防訓練を実施している。防災意識を全職員が持つ事をマニュアルや会議などで共有し、コンセントやプラグなどを含めた定期点検やホーム周辺の安全確認に努めている。また、防犯に関する研修会を行い、災害備蓄は母体とホームで確保し、リストを作成している。	自治会や地域消防団の参加協力を得た訓練には至っていないが、関係者とは変わらぬ情報交換が行われている。また、法人全体で地域の災害対策に尽力しており、引き続きあらゆる災害を想定した訓練や家族への情報発信など今後の取組に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの生活リズムや習慣等を尊重し、その人らしく暮らせる支援を心がけている。また、不適切ケアへの対応も法人内で勉強会の機会を設け、プライドを持ち全職員が働きやすい環境整備に努めている。	その人らしく暮らせる支援を心掛け、職員の接遇やプライバシーへの配慮など研修会や共有を図る機会を大切にしている。呼称は苗字や下の名前など反応や職員との関係性なども考慮して対応している。同性介助については、確認をしている。身だしなみやおしゃれも個々の誇りを損なわないよう、家族の協力も得ながら支援しており、訪問理美容の来訪も、寛ぎの楽しみタイムになっている。	共用空間や居室で安心して過ごせることは入居者への尊厳にも繋がるとしている。ベッドメイキングを整えておくことや、タワ湯たんぽを準備する際、パジャマを上に乗せ温かく着れるようにしておくなど細やかに思慮している。変わらぬ支援の継続に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人が気持ちを表出出来るように、ケアの在り方を表情や言葉に留意し寄添うようにしている。職員側の押付けとならないよう、ご本人が自ら選択・決定出来るようなケアに今後も努めていく。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	心身の安定を保つため、できるだけ規則正しい生活をベースに支援している。基本的に食事時間などは決まっている。しかしそれ以外は出来る限りその方らしくその人のペースで生活頂けるよう柔軟に対応するよう心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節ごとの服装などご家族にも協力いただき、おしゃれができるように支援している。また、理美容での好みの髪型や入浴後のスキンケアなど気を配っている。身だしなみはその人らしさであると考え。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事はご自身で食べるのが一番美味しく召上って頂けると考え、時間を要しても可能な限り自分で食べることの出来る支援をしている。また、楽しみの時間でもあることを理解し、個々の能力や好みに合わせた提供の工夫・支援を行っている。食事の姿勢にも留意し支援をしている。	食を通じての楽しみをコロナの中にあってもできる事をやっていきたいと、状居を見ながらバーベキュー会をはじめ、鍋会、野菜作りやベランダを活用したおやつタイムなどに取り組んでいる。朝・夕のご飯、汁物はホームで調理し食材購入も職員が行っている。昼食や副菜などは隣接するワークセンターで作られており、給食委員会で出された意見なども伝えながら、入居者や職員の楽しみや活力となる食事を支援している。	入居者から「ご飯の量が多い、少ない」など要望が出されることに、職員は遠慮なく言ってもらえる関係性や食への楽しみが伝わるとしている。バーベキュー会をはじめ楽しい食事支援への取組は写真などから確認され、継続した取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食生活は、健康維持の基本であり、栄養のバランスを考慮した食事の提供を行っている。十分な栄養が摂れていない方は個別で高カロリー飲料などの工夫も行っている。飲み物は、お茶・コーヒー・紅茶など数種類用意し、一日1500ml摂取を基本とし支援している。季節に応じて摂取量の工夫を行い、記録に残し継続的支援に努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、必ず口腔ケアを行っている。重度化に伴い、ガーゼによる口腔ケアを行うなど個々の能力に応じケアを行い、異常の早期発見に努めている。常時口腔内の確認を行い、必要に応じ歯科往診につなげるなど口腔ケアの必要性を理解し支援に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレで排泄できるようプライバシーに配慮し声かけ・誘導など支援している。重度化に伴い1人での移乗が難しい場合は、2名で対応するなどしている。トイレで排泄できることが、生活への意欲や尊厳の保持に繋がると考えている。	トイレでの排泄が生活の意欲、尊厳の保持に繋がることを職員間で共有し、個々に応じた声掛けや誘導している。リハビリパンツを使用される方が主であるが、布パンツやオムツなど昼・夜で適切なものを検討し支援している。トイレは4か所設けられ、昨夏にエアコンが設置されるなど、掃除による衛生管理と合わせ、トイレ内も改善している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢になると運動量が減り便秘になりやすくなることを理解した上で、食物繊維を多く含んだ食事や乳製品・水分を多く摂取していたできるように努めている。また、レクでの体操も便秘解消を意識した内容とするなど工夫している。改善が困難な方は、主治医と相談し指示のもと定期的に下剤を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴回数は週2～3回以上としている。入浴がお好きな方は入浴回数を増やして対応している。安全確保の観点から職員2名で対応する入居者の場合、ご本人の希望通りに入浴することが難しい場合もある。入浴をより楽しんでもらうよう入浴剤やBGMの活用等工夫をしている。また、足浴をしていただくなど、くつろいだ気分の提供に努めている。	週2～3回、午前を中心に身体状況に応じてリフト浴や個浴で入浴を支援しているが、要望により回数や午後からも対応している。脱衣所や浴室が広いため、特に冬場は湯冷めなどないよう室温管理や、身体状況で2名介助など安全な入浴支援に努めている。入浴のない日はリビングで庭を眺め、職員と談笑しながら足浴を支援している。乾燥を防いだり楽しみとなるよう保湿効果のある入浴剤の使用や、湯上りには水分補給とワセリンや使い慣れた保湿剤を個々に応じ使用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	お一人お一人の体力や体調に配慮し、休憩・休息のタイミングを調整している。安定した生活リズムを提供出来るよう日中活動(体操・創作活動など)を提案している。また、年齢や体力を勘案して、お昼寝を取り入れ疲労回復にも努めている。天気の良い日は寝具を干して安眠の提供に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の効能など把握するため、個々の薬事情報をファイルし、どのような薬を飲まれているか理解できるよう努めている。また、配薬時も一人ずつ確実にお渡しするなど誤薬の無いよう職員間で情報共有し取り組んでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	今年度はなかなか外出する機会はないが、個々の性格や趣味・嗜好など理解し、役割や楽しみごとなど活動内容に個別性の支援が出来るよう努めている。(裁縫・スケッチ・編み物・歌など)		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	常に社会とつながり、充実した日々を送っていただきたいと支援に努めている。入居者のご希望に応じ、ご家族と協力し外出することもある。地域行事にも積極的に参加しており、社会とのつながりを感じていただける支援を目指している。今後も外出する機会の支援に努めていく。	地域社会とのつながりが持てる外出支援に努めてきたが、感染症への対応から以前と同様の取組は控えなければいけない現状である。ホーム内だけの生活にならないよう、可能な限り敷地内の散歩や野菜の育成を楽しむ、ペランダを活用(日光浴、巨峰狩りなど)している。また、法人との連携や定期的に納入に訪れる販売店主からもたらされる地域の情報なども、外出をはじめとした活動に生かされている。	感染委員会で今後の外出支援について検討していきたいとしている。敷地内の散歩やデッキでの外気浴などの継続に加え、状況を見ながら取り組まれることを期待したい。また、家族も心配なく面会できる日を心待ちにされており、一緒に散歩やこれまで控えていた庭先でのイベントなどの実現にも感染症の収束を願いたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の所持・管理はその方の尊厳にも通じます。個々の能力を理解した上で、ご本人やご家族・施設との話し合いで、所持・管理ができる方については、入居者に所持・管理してもらっている。コロナ禍で外出頻度からお金を使う機会が減っている為、今後検討する。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族や大切な方に対する気持ちを理解した上で、電話や手紙でのやりとりが出来る支援を行っている。コロナ禍に於いては、Skype面会も導入して施設内だけでなく、外部の方との交流が途絶えないように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間であるため、個々に居心地の良い空間づくりを心掛けている。室温・湿度・光の強さに気を配り、季節の物や個人の好きなものを配置。リビングでは音楽・テレビ等楽しんで頂けるよう配慮している。常に清掃し清潔な空間とすることで居心地の良い空間づくりに努めている。	ホーム内はリビングを中心に華美にならないよう季節の飾りつけを施している。廊下に掲示されたイベントや生活の様子を写した写真は、入居者の表情も豊かでホームの日常が伝わってくる。感染症への対応の一つとして、消毒など衛生管理の徹底と、テーブル席も個別使用の物に変更されている。移動手段も独歩やオリジナル荷台を押される方など様々であり、安全に行えるよう物品の配置も考慮している。マスクを着用しているためアイコンタクトや声のトーンへの配慮など、職員自身が環境の一つと捉えていることが聞き取りからも確認された。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	コロナ禍に於いて、リビングのテーブル配置が大きく変わり、感染対策を優先したため、テーブルを1人1台づつにした。必要があれば配置を変えられ、思い思いに過ごせる空間もテーブルの組み合わせで変更できるものとした。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	熊本地震後に、家具が倒れたり動いたりしたため、荷物を減らしてもらった経緯がある。落ち着ける居室づくりは生活の質を高める事と考え、ベット近くに親族の写真を飾る等、プライバシーが保たれる居室空間になるよう今後も努めていきたい。	入居時に家具をはじめ必要な物は持ち込みたい分準備して構わない事を伝えている。しかし熊本地震発生後タンスなどは危険でもあり、プラスチックケースが多くなっている。コロナ禍の入居については、キーパーソンの方が県外であったりすると、環境整備が速やかに出来ない事もあり課題としている。長い入居の方は、不安をもたらすようになった品など家族の判断で持ち帰られており、当初とは違った環境になっている居室も見られた。	感染症への対応として職員は居室の換気や掃除と、消毒のしやすさにも配慮している。今後も訪問を制限している時には、特に家族に代わっての居室づくりや家族の安心に繋がる室内の様子など引き続き取り組まれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各個人のできる力をまず理解し、その方にとって分かる・できる工夫をしている。わかる工夫として、日めくりカレンダーや居室前に名札の表記、タンス内容表記等、日々の生活で不安が発生しないように本人と話し合いできる工夫に努めている。		